

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

吉野作造とキリスト教の影響-1-

著者	松岡 八郎
雑誌名	東洋法学
巻	34
号	2
ページ	1-11
発行年	1991-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003525/

吉野作造とキリスト教の影響 (一)

松 岡 八 郎

一

吉野作造（一八七八年〈明治二十一年〉一月二十九日——一九三三年〈昭和八年〉三月一八日）は、その余りにも有名な基本的主張である民本主義の理論において、広く一般によく知られているところであるが、本稿の目的は、このような主張を形成するにいたった吉野の政治理論的基礎について論究しようとするものである。

周知のように、現代政治は国内的にもまた国際的にもまさに激動を続けており、そこでの根本的にして最大の課題の一つは、依然として、民主主義^{〔1〕}の問題であることは論をまたない。したがって、当然、現代の日本においても、この民主主義の問題について、切実な問題関心をもち、絶えず再検討を続けていかななくてはならないと考えられる。

明治維新以降、民主主義への関心が高揚した時期が三度あることはよく知られているところであり、最初は明治七年（一八七四年）ごろから明治の一〇年代にかけての自由民権運動の時代であり、次は大正デモクラシーの時代であ

り、最後は第二次世界大戦敗戦後の民主主義の時代である。そしてそれぞれの高揚の時代には、それぞれ独自の思想あるいは運動があり、それぞれ貴重な政治的遺産として現在にまで残されている。

そこで、ここで課題としている現代日本の民主主義の問題を再検討しようとするに当たっては、普通、敗戦に伴ってアメリカからきわめて多くを与えられた戦後の民主主義を出発点として考察するのが最も一般的であろう。勿論、遠く自由民権運動にまでさかのぼる必要も全くないとは言えないが、現代では直接的にはその必要はきわめて少ないのではないかと考える。だが、大正デモクラシーについては、それが、独自の内発的な日本的民主主義であり、昭和期に入るにいたって、やがて軍国主義、ファシズムによって踏み付けられ、閉塞させられながらも、細細とした地下水脈として生き続け、戦後の民主主義と合流して、現代の民主主義を形成するにいたったと言うことができる。換言すれば、大正デモクラシーは戦後の民主主義を外発的な民主主義としてのみ止まらせることなく、「戦後民主主義の日本社会への定着は大正デモクラシーを前提としてはじめて可能であった」のである。かくて現代日本の民主主義を再検討するためには、戦後の民主主義の底流となった大正デモクラシーの再考察から始める必要がある。

このような問題関心に基づいて大正デモクラシーを取り上げようとするとき、その中心人物の一人はなんとと言っても、吉野作造であることはなん人も異論のないところであろう。したがって、大正デモクラシーを再検討するための最初の着手としては、吉野がどのような政治理論的基礎に基づいて民本主義の理論を形成するにいたったのか、端的に言えば、その理論の政治理論的基礎はどのようなものであったかを究明することから始めねばならないと思う。

そこで吉野がこの理論を形成するにいたった過程を考察するとき、この理論を最初に明確に提唱したのは、有名な、

大正五年（一九一六年）の「中央公論」一月号に掲載された「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず⁽⁷⁾」という論文においてであったことは言うまでもない。したがって、この理論が明確に主張されるにいたった大正五年前までの吉野の学問的経過をみると、この理論の政治理論的基礎をなしたと思われる主要な与件は、次の二点であったと考えられる。第一点は、第二高等学校時代におけるキリスト教への入信および東京帝国大学法科大学入学後の本郷教会牧師海老名弾正によるキリスト教的感化であり、第二点は、大学入学後、政治学の恩師小野塚喜平次から受けた学問的影響および大学での研究生活（欧米での留学生活を含む）である。そして勿論、この二つの与件は、この理論の政治理論的基礎を形成することにおいて、相互に密接な関連をもち、相互に影響を与えていたのであるが、本稿においては、右の二つの与件のうち、まず第一の与件であるその政治理論的基礎をなしたキリスト教の影響について追究してみたいと思う⁽⁸⁾。

(1) 民主主義の基本的原則について、最も簡明にこれを示しているのが、有名なリンカーンのゲティスバーグ演説（「リンカーン演説集」高木八尺 斉藤光訳（岩波文庫）一四八―九頁 参照）の中に示された定義であり、それによれば、民主主義とは「人民の、人民による、人民のための政治」（Government of the people, by the people, and for the people）を意味し、人民が政治権力を所有し、人民の利益のために、人民みずからがこれを行使する政治とされているが、この言葉が示すような厳密な意味における民主主義はまさに人類の究極的な理想と言ってよいだろう。現実の民主主義はこの三つの原則を完全に備えていなくても、およそこの三原則の実現を目的とし、それが相当程度実現している政治を、通常、民主主義と言ってよく（この意味において、ロバート・ダールの「ポリアーキー」〔Polyarchy〕の概念を参考とする必要がある。ロバー

ト A ダール 高島通敏 前田脩共訳 「ポリアーキー」(三一書房 参照)、したがって完全な民主主義は理念のうち
にのみ成立することになる。人類は完全な民主主義を理念とし、それを目差して永遠の営爲を続けていくのであろう。

(2) 戦後の民主主義の理念を最もよく集中的に表現しているのは、言うまでもなく、「日本国憲法」である。

(3) 大正デモクラシーという概念は、各人各様の内容規定を許す、きわめて曖昧な概念と言われているが、その学説史的展望については、太田雅夫 「大正デモクラシー研究」(新泉社) 一四頁 参照。この大正デモクラシーについての従来の研究方向を、江口圭一教授は次のように二つに分類する。「その第一は、大正デモクラシーを、もっぱら政党政治・政党にかかわらせてとらえる考え方であります。すなわち、大正デモクラシーと政党政治とをパラレルに考える。そして大正デモクラシーの主体とか推進力を、もっぱら政党ないし政党勢力に求めていく考え方です。第二は、それに対して大正デモクラシーをもっぱら人民ないしは民衆運動にかかわらせてとらえる。すなわち、大正デモクラシーは、政治的自由の獲得を中心要求とする民衆運動ないしは闘争が基本的内容であるとする主張です。したがって、その主体・推進力は、人民ないし民衆に求められる。」(司会者江口圭一「大正デモクラシー」(シンポジウム日本歴史20)〈学生社 一一―二頁 参照)としているが、第一は政党重視の方向であり、第二は民衆重視の方向である。そこで筆者は、この二つの方向は密接に関連し相互に影響しあっているものと考え、両者を総合する方向で考えていきたいと思っている。すなわち、大正デモクラシーを広義の概念として把握していこうという訳である。

(4) 松尾尊允 「大正デモクラシー」(岩波書店) 「はしがき」 VI 参照。

(5) 吉野の全生涯についての詳細な伝記としては、田中惣五郎 「吉野作造」(三一書房)があり、簡にして要を得ているものとしては、「近代日本思想大系」 17 松尾尊允編集 「吉野作造集」の松尾教授による「解説」がある。本稿は、その経歴上の記述について、これらに依存している。

(6) 大正デモクラシーの時代は、普通、日露戦争後から、護憲三派内閣が普通選挙法を成立させ、三つの合法無産政党が成立するにいたるまで、すなわち、明治三十八年(一九〇五年)から大正一五年(一九二六年)までの間とされるが、この間の思想および運動の発展段階を区別するとき、次の三つの段階に分けることができる。第一段階は、日露戦争後の講和条約反対

運動から、第一次護憲運動を経て第一次世界大戦へ参加する大正三年（一九一四年）八月までの期間であり、第二段階とは、第一次世界大戦の参戦後から、米騒動、原敬内閣の成立を経て、普選運動が最高潮に達する大正九年（一九二〇年）二月までの期間であり、第三段階とは、普選運動が分裂してから、第二次護憲運動で護憲三派内閣が成立し、普通選挙法が制定され、合法無産政党が成立する大正一五年（一九二六年）までの期間である（太田雅夫 前掲 三頁 参照）。そして、この三段階におけるデモクラシー思想の指導理念としては、第一段階は「立憲主義」、第二段階は「民本主義」、第三段階は「社会的デモクラシー」であり、さらにそれぞれの段階における主要なイデオログを挙げれば、第一段階では浮田和民、島田三郎、美濃部達吉、尾崎行雄であり、第二段階では吉野作造、大山郁夫、長谷川如是閑であり、第三段階では室伏高信、大山郁夫、吉野・大山らの門下生である「新人会」「建設者同盟」「劳学会」の学生および卒業生の急進的知識人たちであった（太田雅夫 前掲 三―四頁 参照 および柴沢幸二「大正デモクラシー期の政治思想」〔研文出版〕九―一〇頁 参照）。かくて吉野は第二段階における代表的なイデオログの一人であり、その基本的政治理論が民本主義の理論であったことは言うまでもない。だが勿論、吉野の学問的生涯においては、民本主義の理論を唱導したそれだけではなく、さらには国際主義を主張し、あるいはまた政治史的研究殊に明治文化研究に励んだことなどを忘れてはならない（三谷太一郎「大正デモクラシー論」〔中央公論社〕一五六―八頁 参照）。

- (7) その全文については、「吉野作造博士民主主義論集」〔新紀元社〕第一巻「民本主義論」二―一三〇頁、三谷太一郎責任編集「吉野作造」『日本の名著』48（中央公論社）九一―一八一頁、松尾尊允編集「吉野作造集」前掲 五三―一二六頁、岡義武編「吉野作造評論集」〔岩波文庫〕一〇―一三一頁、三谷太一郎編「吉野作造論集」〔中公文庫〕八―一三五頁、など参照。
- (8) 第二の与件については、追って別稿を期したい。

二

吉野作造がキリスト教へ入信したのは、仙台の第二高等学校在学中のことであった。吉野は、明治一一年（一八七八年）一月二九日、宮城県志田郡古川町（現在、古川市）において、父年藏、母ここの長男（上に二人の姉がいた）として出生し、家業に綿製造問屋を営む中流の商家であった。幼年時代はひよわで非常におとなしい児であったが、家が新聞雑誌の取次店を兼ねていたこともあって、書物好きな少年⁽¹⁾として育った。やがて明治一七年（一八八四年）に古川尋常小学校へ入学し、さらに高等小学校へ進み、読書好きで文章の上手な少年として、明治二五年（一八九二年）には古川高等小学校を一番の成績で卒業し、親や郷党の大きな期待を受けて、また姉が婿養子を迎えて家督を相続したこともあって、家を離れ、仙台の中学校へ進学することとなり、古川町からの最初の入学者として、創立直後の県下唯一の中学校・宮城県宮城中学校に入った。⁽²⁾一年後には特待生となり、その後も首席を続け、高等学校への無試験入学の特典を得た。このように中学生時代も、学業は抜群であり、同時に読書を愛し、観劇を好み、友人たちと回覧雑誌を発行し、また中央の学生・生徒相手の雑誌に盛んに投稿したりして、まさに文学青年ではあったが、まだ美文調を好み、思想的に目覚めることはなく、在学中に起こった日清戦争に対しても、愛国心を燃やす普通の生徒であった。将来の志望については、当初、小学生のころから興味をもっていた数学であったが、中学四年生ごろからは哲学に変わり、さらに卒業間際には法科志望となった。⁽³⁾このような志望の変化は、「吉野における未成年から成年への成熟過程に照応していた」⁽⁴⁾と考えることができるであろう。

明治三〇年（一八九七年）、中学を首席で卒業し、同年九月には無試験で同じ仙台の第二高等学校法科に入学したが、入学当時、吉野は七人の中学生たちとともに自炊しながら共同生活をしていた。これは模範生吉野の精神的感化を受けようとする生徒たちの集まりであり、私塾とも言うべきもので、「吉野は吉田松陰の真似をしている」と評されたほどであったが、後年の「新人会」⁽⁶⁾（大正七年へ一九一八年へ二月七日結成）の学生に対するその影響力を考えると、若くして既にこのような感化を及ぼすことができる資質^{II}指導性をもっていたのである。さらにこの指導性は、大正五年（一九一六年）以後、民本主義の理論を唱導したことによって、社会のきわめて多くの人びとを啓発する基礎ともなったのではないかと考えられる。

次いで二高入学間もないころ、キリスト教に接近したことによって、吉野は非常に大きなその思想的影響を受けることになった。吉野が初めてキリスト教に接したのは明治二八年（一八九五年）の中学四年生時代であったと言われているが、本格的に接触するようになったのは、アメリカの婦人宣教師で仙台の尚綱女学校長であったアンネ・サイレーナ・ブゼル⁽⁷⁾（Miss Anne S. Buzzell）一八六六年——一九三九年）が主宰していたバイブル・クラスに出席するようになってからのことである。このバイブル・クラスには、当時、二高の優秀な生徒一〇数名——その中には栗原基、内ヶ崎作三郎、土井亀之助、小西重直、島地雷夢などがいた——が参加していたが、これらの友人の勧誘によって加わったのである。こうしてその人格の形成にキリスト教の影響を深く受けることになる。当時、吉野は学業に優れ、文芸部に所属して、美文調の文章を得意としており、作文の課題として、「方丈記に現はれたる長明の厭世観を評す」という作文を書いたが、これは鴨長明の悲観的厭世観に対し樂天的的人生観の立場よりする批判的文章で、

この人生観こそキリスト教の影響であり、この楽天的人生観は、他人に対する親切とともに、キリスト教の感化の結果として、終生その人格の根底をなしたものであると言われている。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

またこの文章の作成に際して、国語作文担当の教師佐々政一（醒雪）の厳しい添削指導を受け、「始めて論文とは一体どんな風を書くものか」を教えられ、先生は「私の一生の上に深甚の感化を与へた者の主たる一人である」⁽¹⁰⁾とみずから述懐しているように、将来、学者として立身していくのに必要な基礎的教養としての論文の作成方法を、この高校生時代にはば修得したのではないかと思われる。論文の作成において重要にして必要なことは修辞（美文調）ではなく、論理であり、さらにそれを支える思想であることを学んだのである。

このようにキリスト教への接近によつて人格が高まり、学業も大いに進んだが、なお吉野の人格形成に重大な影響を与えたのが、仙台浸礼教会^{バプティストチャーチ}で浸礼⁽¹¹⁾を受け入信したことである。この入信の内的衝撃については明らかではないが、明治三十一年（一八九八年）七月三日、親友の内ヶ崎と島地とが浸礼を受けた同じ日、吉野も自身の独自の判断でブゼルに対して信仰を告白し、祖先伝来の曹洞宗からキリスト教に入信した。当時、キリスト教に対する偏見がなお強く、その入信を理解する人ばかりではなかったが、前述の作文に現われたような楽天的人生観を確固たる信念とするためには、真面目にキリスト教に対応して、入信することに決心したのではないかと思われる。⁽¹²⁾

さらにまた吉野は、生涯における大問題としての恋愛——結婚問題に出会うこととなり、入信した同じ年、当時、仙台女子師範学校に在学していた、同信の阿部たまのと知り合い、翌三十二年（一八九九年）結婚するにいたった。⁽¹³⁾まだ学業なかばの高校生であり、年齢的にも相当早すぎるようにも思われるが、早婚が普通の時代であり、必ずしも早

すぎることはなく、キリスト者としての吉野は恋愛と結婚とを真面目にストレイトなものと考えた結果であろうと思われる。

このような吉野の生涯に決定的影響を及ぼした入信および結婚におけるその行動を見ると、非常に真面目にして卒直であり、大に行動的であり、またきわめて勇気があると言うことができるが、このような性質はキリスト教信仰に基づく楽天的人生観によつて裏打ちされていたのであり、後年、単なる講壇政治学者ではなく、より積極的な行動的政治学者として活躍していった素地をそこに認めることができよう。それでは、このような人生観はどのようなものであったのであろうか。吉野は、「吾々は総ての人類を神の子として総ての人類に一個の神聖を認め、固く基督に結んでいる。之れ程確実な人格主義の信念がまたと世にあらうか。」と述べているように、キリスト教信仰に基いて、すべての人間の内に神を認め、それゆえ、すべての人間を信する肯定的人間観⁽¹⁴⁾が吉野の人生観の根底にあり、その肯定的人間観を根底として、人生への限らないオプティミズム⁽¹⁶⁾＝楽天的人生観が形成されたのであり、「自分としては基督教によつてすべての人を同胞同類と見るの氣分に深く沁み込まれて居ることを満足に思ふもの」⁽¹⁷⁾となるが、このようなキリスト教信仰を根底とする肯定的楽天的人生観は、後年、民本主義の理論を生み出す政治理論的基礎となる。

さらに吉野は、明治三十三年（一九〇〇年）七月には二高をも首席で卒業し、出京して、同年九月東京帝国大学法科大学政治学科に入学するとともに、やがて本郷教会牧師海老名弾正（安政三年へ一八五六年）―昭和十二年へ一九三七年）の非常に大きな感化を受けることによつて、このような人生観をさらに一層深め、進んでその民本主義の理論

の政治理論的基礎を形成していくことになる。

- (1) 幼年時代については、吉野作造 「公人の常識」 (文化生活研究会) 二二三―二四頁 参照あるいは吉野作造 「閑談の閑談」 (書物展望社) 三〇―二頁 参照。
- (2) 小学生時代については、前掲の「閑談の閑談」 二九六―三〇一頁および三〇二―七頁 参照。
- (3) 中学生時代については、前掲の「閑談の閑談」 三〇七―三一七、および三二〇―八頁 参照。
- (4) 三谷太一郎 前掲の「大正デモクラシ論」 一六二頁 参照。
- (5) 真山青果 「青年時代の吉野君」 赤松克麿編 「故吉野博士を語る」 (中央公論社) 一二九―一三〇頁 参照。
- (6) 「新人会」については、石堂清倫 堅山利忠編 「東京帝大新人会の記録」 (経済往来社) およびH・スミス著 松尾尊 允 森史子訳 「新人会の研究」 (東京大学出版会) 参照。
- (7) 三谷太一郎 前掲 一六三頁 参照。
- (8) 三谷太一郎 前掲 一六四頁 参照。
- (9) 岡義武編 「吉野作造評編集」の岡義武「解説」 三一四―五頁 参照。
- (10) 前掲の「閑談の閑談」 三一七―八頁 参照。
- (11) 「当時の洗礼は、講壇下の水槽に牧師に抱かれて、会衆が厳肅に讃美歌をうたう中を、逆さまに水中に倒され、水に沈む刹那に再び外に引き上げられるといった文字通りの浸礼だったようである。」 武田清子 「土着と背教」 (新教出版社) 一九七頁 参照。
- (12) 三谷太一郎 前掲 一六四頁 参照。
- (13) 「(たまの)の父は阿部弥吉、秋田藩出身で、仙台監獄内で受刑者に職業を補導する役目を担当していた。当時の武士くずれの一つの就業形態といえる。その家は吉野の寄宿する塾の近くにあった。阿部家の長女たまのは仙台女子師範に在学して

いた。漫礼当時の吉野は二十一歳、たまのは十九歳であった。この夏休に、たまのは友人の田尻らと鳴子温泉にあそんだ。鳴子八湯の名で知られた温泉地である。同じくここに遊んだ吉野と、トランプなどして遊んだそうである。恋愛から結婚へ、結婚は翌年に行われている。」 田中惣五郎 前掲 三一―二頁 参照。

(14) 「デモクラシーと基督教」 (「新人」大正八年三月) 松尾尊允編集 「吉野作造集」 前掲 二〇八頁 参照。

(15) この肯定的人生観を示すものとしては、吉野作造 「魂の共感——谷崎潤一郎氏作の『或る調書の一節』読後感——」 前掲の「閑談の閑談」 六九―七八頁 参照。

(16) 三谷太一郎 前掲 一六六―七頁 参照。

(17) 吉野作造 「斯く信じ斯く語る」(文化生活研究会) 五頁および川原次吉郎編 「古川餘影」三二―八頁 参照。

(未完)